

実践⑥ 鹿児島県立吹上高等学校

1 はじめに



吹上高等学校は、工業系の電気科・電子機械科、商業系の情報処理科の3学科を設置する専門高校である。日本三大砂丘の一つに数えられる吹上浜を見下ろす高台に位置し、素晴らしい学習環境に恵まれている。また、「技術と資格で未来を切り拓け!」をスローガンに全校をあげて資格取得に取り組んでおり、近年、資格や部活動実績をバネに進学・就職ともに高い進路決定率を誇っている。このことで、ここ数年は定員も充足し、一層元気な高校へと成長しつつある。

本校図書館は、蔵書数約15,000冊で、一日の利用者数が100人(全校生徒数約360人)を超えることもある。また、生徒一人当たり貸出冊数が、19.2冊(平成24年度／**県平均9.1冊**)と多く、本に親しむ生徒が多いことも特徴の一つである。

生徒に『知る喜び』・『感謝する気持ち』・『思いやり』・『社会人としてのマナー』を高校生活でしっかり身に付けさせるべく、図書館の入館・退館時は「失礼します。」と挨拶をし、借りた本の返却日を守らせている。生徒・司書とのコミュニケーションだけでなく、気持ちの良い挨拶がいつでも誰にでもできるように学校全体で取り組んでおり、長期延滞者がいないということも特徴である。

2 活動方針



- (1) 読書に興味がない生徒も自ら図書館のリピーターになってもらい、学年・科・男女を問わず図書館がコミュニケーションの場になるような運営を心掛ける。
- (2) 資料提供を通じて、利用者の高校生活をサポートする。 《おすすめ本の手作りPOP》
新着案内は配布ではなく、じっくり見てもらうため各教室へ掲示する。
- (3) 用意されたものではない“自分たちの図書館”であると意識付けるように努める。
館内に常時、折り紙等と関連本を設置し、図書館内の展示物・本の作製など図書委員だけではなく他の生徒にも積極的に参加してもらう。
- (4) 公共図書館などを積極的に利用し、地域との交流をもつよう取り組む。
地域の公共図書館等のサポートが充実しており、団体貸出も冊数無制限・貸出期間3か月間という条件で利用できるため、本校図書館に蔵書がない場合も生徒・職員のリクエストに迅速に応えることができる。結果、生徒だけでなく保護者などからのリクエストも多く、読書を通して家族のコミュニケーションも活発になっている様子が伺える。また、課題研究に必要な資料等も地域の市役所から快く提供してもらえるため、地域の方に生徒が直接感謝の気持ちを伝えることができる。
- (5) 利用者の知的好奇心を生み出せる図書館をつくる。
季節の展示や特徴のあるコーナーを設営する。



《季節の展示の様子》



《切り紙作品展示の様子》



《図書館利用の様子》

3 取組事例の紹介

- (1) 朝の10分間読書 (約10年間継続している)
SHR前に実施している10分間の朝読書開始の校内放送を図書委員が輪番で行う。
- (2) 文化祭展示・舞台発表参加

“おすすめ本の手作り POP”，“読みか聞かせボランティア活動風景”等を作製したものの展示や、書画カメラとプロジェクターを使った絵本の読み聞かせ(3冊)を舞台で実演し、文化祭後に学校ホームページ上に掲載してもらう。

(3) 読書週間での紙芝居実演

紙芝居をめくる練習や平仮名だけの文章を読むことは想像以上に難しく、限られた練習時間での発表は、緊張との戦いである。まだまだ発展途上だが、自身の殻を破り、新たなことに挑戦している姿をクラスメイトや職員に披露している。

(4) 公共図書館での読み聞かせボランティア (年間3回実施している)

ア 図書委員が3班に分かれ、年3回日置市立ふきあげ図書館内おはなしのへやでの“読み聞かせボランティア”に参加している。

イ 平成19年12月8日から続けている吹上高校生による読み聞かせは、毎回準備に日置市立ふきあげ図書館職員の方のサポートがあり、地元の子供たちに好評である。

ウ 練習時間の確保・未経験者への指導など課題も多いが、読書指導担当職員・司書が協力して読み聞かせの指導を個別に行い、本番に臨んでいる。

エ 平成23年度“日置市子ども読書活動推進大会”に吹上地区代表として舞台発表をした。



《読書週間／紙芝居実演の様子》



《読み聞かせ実演の様子》



《読み聞かせ／紙芝居実演の様子》

4 成果

- (1) 朝読書以外にも、部活動や帰宅時の交通機関利用者などの待機場所として図書館が定着したため、生徒が本に触れる機会が多く、“時間が空いたら図書館へ”と考える生徒が多い。
- (2) 図書館利用者の増加に伴い課題研究だけではなく、進学・就職に関するレファレンスも増えている。
- (3) 読書に興味がない生徒も自ら図書館に来てもらいリピーターになってもらうため、映画コーナーなど特徴あるコーナーを設けた。このことが功を奏し、学年・科・男女を問わず図書館がコミュニケーションの場になっている。
- (4) 全生徒が返却期日を守ることで、予約本などの受け渡しがスムーズに行われていることが、貸出の回転率を上げている。
- (5) 図書委員の活動に関しては、カウンター当番や図書だより・読み聞かせボランティア・予約本の連絡・本の督促などの活動に加え、文化祭に全図書委員が参加することで、学校内外に活動の周知が図られている。
- (6) 生徒の読書傾向の偏りや、電子辞書利用増による紙媒体の辞書引き能力低下などの課題もあるが、授業で辞書活用を取り入れることで改善もみられる。

5 おわりに

「本を読みたいけれど、時間がない。」という生徒が多数存在する本校では、図書館発信での様々なアプローチを試みなければ、義務教育期間中に身に付いた本への興味・読書習慣を維持することは難しいと感じている。また、今まで読書習慣がなかった生徒に児童書以外の図書を紹介し、新たな読書習慣を身に付けさせる可能性を秘めているのが高校図書館だと考える。これからも地域と連携を図り、さらに生徒・職員の読書活動推進に学校全体で取り組んでいきたい。